モスクワでの国際ドストエフスキー学会に参加して

木寺　律子（同志社大学非常勤講師）

2013年7月8日から14日まで、モスクワで国際ドストエフスキー学会の第15回国際シンポジウム「ドストエフスキーとジャーナリズム」が開催され、これに参加する機会を得た。シンポジウムは、モスクワのタガンカ劇場の近くにあるソルジェニーツィン記念会館（Дом русского зарубежья им. А.И. Солженицына）で行われ、連日、約140人の参加者による口頭報告が次々と行われた。

国際ドストエフスキー学会（International Dostoevsky Society, Международное общество Достоевского）は、ロシアや欧米の研究者を中心に 1971 年に設立され、おおよそ 3 年に一回、世界各地で国際シンポジウムが開催されている。使用言語は、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語である。

今回の国際シンポジウムに参加した日本人研究者は、私、木寺律子のほかに、清水孝純先生、木下豊房先生、望月哲男先生で、清水先生の息子さんと木下先生の奥様もいらっしゃっていた。ドストエフスキー文学研究の分野では日本人研究者がロシアや欧米で広く知られている。国際的な場での日本人研究者の口頭報告は以前から数多くあるので、日本はドストエフスキー研究の進んだ国として世界でも評価が高い。今回の日本人参加者の口頭報告の題目は以下のとおりであった。

Тоёфуса КИНОСИТА (Тиба, Япония) Проблемы интерпретации авторского образа Достоевского в последние десятилетия в русле теории постмодернизма

Tetsuo MOCHIZUKI (Sapporo, Japan) Jesuitism in Dostoevsky: Images, Function, and Sources

Takayoshi SHIMIZU (Fukuoka, Japan) From Topics to Fictions: Poetics of Suicide in “The Diary of a Writer”

Рицуко КИДЭРА (Осака, Япония) «Кроткая» и «Сон смешного человека» в

контексте «Дневника писателя» Достоевского

私の口頭報告の後では、日本での文学教育やドストエフスキー研究の状況、日本的なドストエフスキー理解について多くの質問が出た。キリスト教文化ではなく神道や仏教の文化的背景を持つ日本において、キリスト教文化のロシアや欧米における以上に、ドストエフスキー文学の本質に迫る研究ができることについて、日本人研究者は自信を持ってよいと思う。

学会開催期間中には、さまざまなエクスカーションもあった。私はすべてに参加するだけの時間的余裕がなかったのが残念であるが、モスクワのドストエフスキーの家博物館には皆と一緒に行った。この博物館にはもちろん以前にモスクワ留学中に個人で行ったことがあったが、何度訪問してもよい場所である。

12 日の夕方には Пашков Дом で懇親会が開かれた。懇親会会場には、ドストエフスキーの自筆原稿の展示がなされていた。ドストエフスキーの手書きの原稿は、筆跡が大変美しい。

口頭報告終了後の 13 日のエクスカーションでは、多くの研究者がモスクワ郊外のダロヴォエ（Даровое）に行ったようである。ここでは、ドストエフスキーが子供の頃に住んでいた家を博物館として保存する活動が進んでいる。私は大学の授業をあまり多く休講にできないため、早めに帰国したのでダロヴォエに行けなかった。しかし、いつかは必ずダロヴォエを訪問したい。14 日には私はすでに帰国していたが、モスクワ郊外の町ペレデェルキノのチュコフスキーの家博物館やパステルナークの家博物館へのエクスカーションがあったようである。こちらには、私も以前行ったことある。

この学会の成果は 2 冊ほどの本に分けて刊行されるが、私の論文は、すでに刊行された共著『ドストエフスキーとジャーナリズム』(«Достоевский и журнализм» (“Dostoevsky Monographs: A Series of the International Dostoevsky Society” vol.4.) 2013, Спб.) の方に掲載された。私の論文題目は «Кроткая» и «Сон смешного человека» в контексте «Дневника писателя» Достоевского である。

今回の国際学会参加では、多くのドストエフスキー研究者と新たに知り合うことができ、有意義に過ごせた。また、モスクワ市内の交通の便の良い場所での学会開催であったため、ついでに、モスクワ在住の友人たちと久しぶりに会うことができた。私が国際学会の場でロシア人研究者と質疑応答できるのも、モスクワで日本語を学んでいるロシア人の友人た

ちとの学生時代からの付き合いの中で、ロシア語とロシア式の生活習慣を学んできたからであることを考えると、彼らとの再会は嬉しかった。

私のように非常勤講師の立場では、国際学会に参加したくとも渡航費用を準備するのが大変である。今回、日本ロシア文学会から国際交流助成金をいただくことができて、大変ありがたく思っている。